

(平 三十 文後)

# 小論文

- ・問題は1～12ページである。
- ・下書き用紙は中に2枚入っている。

注意 解答は答案用紙に縦書きで記入しなさい。

小論文 二〇〇点

次の文章は、酒井隆史『暴力の哲学』の一節である(ただし、一部に変更と省略がある)。これを読んで、あとの問一～三に答えなさい。

暴力のあたらしいパラダイムという話をしました。ところで、暴力の問題化のやり方はさまざまなれど、もっとも暴力が知的・実践的に真剣に問われた時代、これが一九六〇年代、そしてぎりぎり七〇年代の前半だろうとおもいます。この時代はいわば暴力が政治性を必然的に帯びていた時代でもあるし、ということは暴力がなにがしかの意味を担えた時代でもあります。あるいは、逆にいえば、暴力に意味を、政治性を、与えようという努力がなされた時代でもあるといえるとおもいます。こうした政治的アリーナ自体が、八〇年代以降縮小していくわけです。ここでは、この努力のなかでいったいなにが問われていたのか、その問いの磁場へと足をむけてみましょう。

まずそのなかでももともと有名な人、マーティン・ルーサー・キング、キング牧師(一九二九―六八)をとりあげてみたいとおもいます。キングはいわゆる公民権運動の指導者のひとりであり、マハトマ・ガンディーらに影響を受けつつ非暴力直接行動を提唱した実践家として有名です。よく知られていることですが、アラバマ州モンツゴメリーというアメリカ南部の人種差別のきわめて激しかった地域の教会でバプテスト派の牧師として活動していた若きキングは、この地でわき起こったバスでの人種隔離への抵抗運動のなかで運動の牽引役となり、その後、アメリカ合衆国南部中で大きなうねりとなる、一九世紀の終わりからつづく人種隔離政策に抵抗する運動を促進させ、数々の成果をあげました。

しかし、その非暴力についての思想はとりわけ日本においては、それほど知られているとはおもえません。

たとえばキングに即するならば、あるいはガンディーに即するならば、非暴力直接行動がそれ自体「ピースフル」なものであるとするイメージはまったくのあやまりです。日本でイラク反戦のデモのさいにしばしば見受けられた、たとえば非暴力であれば、デモ中にいやがらせをする警察とも仲良くしなければならないというような、緊張を忌避することがなにか運動の発展に意味がある

というような発想はキングともガンディーともまったく無縁です。キングは非暴力直接行動を、ただ「平和」的であるような手段とは決してみなしてはいませんでした。ここには戦術のみならず、平和そのものについての考え方の根本的な違いすらひそんでいるようにおもいます。つまり、平和とはたんに「波風の立たない」状態なのか、それともダイナミックな抗争状態さえはらんだ、絶えざる力の行使によって維持、拡大、深化されるべき力に充ちた状態なのか。つまり、たんに「平和」を乞い願うだけなのか、それとも「平和にパワーを」というスローガンでいくのか？ 次の引用は、キングのなかでもっとも重要なテキストからのものです。

「なぜ直接行動を、なぜ<sup>シットイン</sup>坐り込みやデモ行進などを。交渉というもつと良い手段があるではないか」と、あなたがたが問われるのはもつともです。話し合いを要求されるという点では、あなたがたはまったく正しいのです。実に、話し合いこそが直接行動の目的とするところなのです。非暴力直接行動のねらいは、話し合いを絶えず拒んできた地域社会に、どうしても争点と対決せざるを得ないような危機感と緊張をつくりだそうとするものです。それは、もはや無視できないように、争点を劇的に盛り上げようというものです。緊張をつくりだすのが非暴力的抵抗者の仕事の一部だといいましたが、これは、かなりショッキングに伝わるかもしれません。しかし、なにを隠しましょう、わたしは、この「緊張(tension)」ということばを怖れるものではないのです。わたしは、これまで暴力的緊張には真剣に反対してきました。しかし、ある種の建設的な非暴力的緊張は、事態の進展に必要とされています。

キングのこの言葉を理解するためには、「敵対性(antagonism)」と暴力とをひとまず区別しなければなりません。あるいは敵対性を戦闘性(militancy)などという言葉におきかえてもいいのですが。現在、敵対性それ自体が暴力と等しいものであるようにみなされる傾向があるようにおもいます。なにかいまあるシステムに対して「波風をたてる」こと自体が、ほとんど犯罪のようにみなされ、ときに「テロ」とすらみなされる傾向です。この傾向は「テロとの戦争」とも決して無縁ではありません。とすれば、いまここで戦争に反対するのならば、こうした傾向そのものも打破していかなばならないということにならないでしょうか。

葛藤や紛争それ自体を、社会のなかにくり込んで発展してきたのが近代社会の展開だとすると、いまこの状況が大きく変化しつつあることを「テロとの戦争」からはみてとれます。いわゆる「市民社会の衰退」、「媒介の場の消滅」といわれるような状況です。このような状況がとくに深化しているがゆえに、少なくとも他の先進国以上に日本では葛藤や摩擦そのものが暴力的なものとみなされる傾向が強まっているといえるでしょう。

キングのこの「バーミングハムの獄中からの手紙」と題されたテキストは、非暴力直接行動のための基本テキストのひとつです。ここでキングは、非暴力直接行動を、潜在的に潜伏させられている敵対性を暴露する、あるいは敵対性を構築する手段として考えています。もちろん「汝の敵を愛せよ」のキングにとっては、敵対性を構築し、敵を認識すること、その敵を愛することは矛盾しないのですが、それはともかく、ここで定義された非暴力直接行動はすぐれて「政治的」な行為なのです。ここでいう「政治的」なものとは、あとでもっと詳しく述べますが、おおよそこの敵対性のことです。

キングは、みずから指導的立場にあった公民権運動が、やがてその白人との統合主義の理念や非暴力という闘争手段に対する黒人たちの内部からの批判にさらされ、公民権からブラック・パワーへと、地理的には南部地域から北部都市へと闘争が発展・深化していくなかで、苦しむことになります。キングは、そのプロセスのなかでじぶん自身の影響力の低下を深刻に受けとめるのです。しかし、マルコムXや、キングよりはマルコムXからより強く影響を受けたといえるブラック・パワーが台頭する以前も以後も、キングは、一貫してFBIのフーバー長官に敵視され、盗聴やいやがらせをくり返されていました。キングは多くの公民権運動の指導者や公民権運動を支持していた「リベラル」たちの批判や忠告をふりきって、ベトナム戦争への反対の立場をあきらかにし、国内の人種差別とアメリカ合衆国の帝国主義的な対外政策に共通の構造、すなわち、アメリカ合衆国の資本主義体制のあり方そのものをみいだします。キングは、アメリカの人種差別を真に解決するためにひかれるべき敵対性の線を、階級のあいだにもみいだし、いわば階級闘争の方にむかってどんどんシフトしていくわけです。一九六八年の暗殺前の数ヶ月間、キングはこのみずからの分析を実践的に推し進めるべく、「貧者のキャンペーン」を組織化しようと奔走します。そのような動きのなかでキングは殺害されてしまうのです。この暗殺はその後の捜査（実行犯とみなされた人物は現在でも無実を訴えています）のおかしさもふくめ不可

解な点が多く、いまでは政府が関与していたという証拠がかなりあがっています。

とはいえ、そのようにアメリカ合衆国のダークな最深部へとむかう以前から、つまり、その活動の初期から、キングはすでに「危険人物」でした。かれは、モントゴメリーでのバス・ボイコット運動の成功以来、南部の各地をまわって、黒人たちの闘争の組織を手助けしたり、促進したりする行動を精力的におこないます。この手紙が書かれたアラバマ州バーミングハムもそのひとつです。キングは、いわば「火のないところに煙をたて」、つくらなくてもよいところに敵対性を構築してまわる「よそものの扇動者（outside agitator）」とみなされ、激しい攻撃を受けつづけます。

この手紙でキングは、おまへは「過激主義者（extremist）」であるという、白人牧師や「リベラル」によるレッテル貼りに対して、じぶんは「過激ではない」——イヤなものをイヤというにも、お上や世間への「申し開き」から入るというのはいかにも現代日本的なものです——と応じるのではなく、そもそもイエスも、パウロも、ルターも、リンカーンも、ジェファースンもその時代においては「過激主義者」だったではないかとして、こう述べます。「問題は、われわれが過激主義者かどうかではなく、どういう種類の過激主義者になるかということです」（強調引用者）。つまり、敵対性や対立を激化させることそれ自体はうたがうべくもない前提であって、どのような敵対性をどのように激化させるのか、それが問われるべきだ、ということです。このバーミングハム刑務所からの手紙は、キングのもっとも政治的なテキストのひとつだとおもいます。ここでは非暴力直接行動は政治的な次元に焦点化されています。とりわけこの政治的次元を忌避する傾向がきわめて強い現在の日本においては、道徳的・宗教的な次元よりもまずは政治的な次元に焦点をあて、非暴力なるものの意義を強調すべきだとおもいます。

キングからするならば、暴力を控えるということは敵対性を激化するということになる。ここがポイントです。敵対性と暴力を区別しなければ、結局、暴力に直面しても聖人のようにふるまえ、というたんなるモラル論、あるいは宗教論に帰着してしまうおそれがある。非暴力直接行動とは、より大衆の力を強化するために、要するに、よりラディカルにやりたいために暴力を控えることなのです。これはいわば、相手の巨大な力、あるいは暴力という物理的力に積算された力を分解させ拡散させつつ、うまくみずからの力を最大限にまで発揮させて対抗する柔術のようなものです。だからこそ、そこから多様で創造的な戦術の展開が可能に

なってくるわけです。

しかし、キングのなかにはある動揺があります。デイヴ・デリンジャーという人物がいます。第二次大戦のさいに徴兵拒否で投獄されて以来、ベトナム反戦から現在にいたるまで反戦運動を担ってきたまさにアメリカの活動家の古参にあたる人物なのですが、キングの描写でかれのものにまざるものはあまりみることがありません。

そこでえがかれるのは、高潔な人物としてのキングではありません。もちろん、フーバー長官が盗聴・録音し、その脅迫の決め手となったキングの女性関係の「だらしなさ」はもはやよく知られています。そこではなくて、ここでの動揺は上下にふれるものです。つまりデリンジャーいうところの社会改革についての「上意下達式のアプローチにとりつかれてしまった」キング。モントゴメリーにおける闘争の成功で有名人になり、影響力も増大し、政治家、とりわけ当時の大統領J・F・ケネディとのつき合いもできたことから、みずからの力を過信し、変革のよりどころを大衆ではなく「お偉方」に求めて陳情活動に熱心に走りがちなキング、まさにじぶんたちが触発した非暴力直接行動が、黒人大衆にも勇気とモデルを与え、さまざまな場所でさまざまなスタイルの闘争が展開をみせているにもかかわらず、その現場よりもホワイトハウスでの話し合いを大事にするキング、そしてお偉方をみずから利用した気になっているけれども、じつはうまく利用されているキングです。デリンジャーら、公民権運動の活動家たちはそのキングを、かれの力の真の源泉に、つまり大衆の側にひき戻そうと懸命に努力をしています。キングは、すでにふれたように最終的にはこの大衆のほうにひき返す歩みのなかで、ベトナム戦争への反対の意志をはっきりと示し、国内の人種問題をアメリカの資本主義、そして軍事政策と一体化した帝国主義と深くからみあったものとしてとらえはじめます。北部ゲット<sup>(注二)</sup>ーの問題を同時にグローバルな水準での支配と搾取構造の問題として把握するわけです。キングにとって、ローカルな方にむかう動きとグローバルな方にむかう動きが同時なのです。

その一方で、つねに「お偉方」と無縁でありつつ、ニューヨークのハーレムのなかで活動をつづけたのがマルコムXです。マルコムXは、当時からキングと激しく対立させられました。じつさいにマルコムはキングたち公民権運動の潮流を手厳しく批判していましたが、一方でこうもいっていました。じぶんがより激しく白人社会から敵視されることで、かれらはキングたちを「よりマシン」



だと考えるようになる、そうすることでじぶんはキングたちを手助けしているのだ、と。もちろんこれは皮肉まじりなわけですが。

この二人をもっともへだてる対立軸が暴力とされています。かたや非暴力でかたや暴力というわけです。

たしかに、手段と目的という図式で整理するとすれば、キングの議論は、正しい目的のためには手段も正しいものでなくてはならないとまとめられるでしょう。この点についてはガンディーも似ています。正しい目的のためにまちがった手段を使うことは道徳的に正しくない。差別に反対するならば、リンチに反対するならば、暴力という手段を使つてはいけない。目的は手段を正当化しないというのが、この理念です。

またこの図式を使うならば、キングのライバルとみなされていたマルコムXは、目的が正しければいかなる手段もとる、といっているようにみえます。「いかなる手段をとろうとも (by any means necessary)」という有名なフレーズもあるぐらいですから。

たしかに単純に考えると、目的のためならば手段は選ばぬという道具主義的な発想になるし、八〇年代にマルコムXが復活したときに、サバイバルのためなら手段は選ばないとの再解釈をこゝむり、ある種のギャングスタイル(注三)のなかに取り込まれてしまった面もあります。でも、問題はそんなにかんたんなものではありません。

もともと暴力主義者マルコムXのイメージは主流メディアによるプロパガンダ的なものでした。マルコムXがキングの非暴力主義を批判し、なにがしかのかたちで暴力を肯定するにしても、あくまでも「相互的な原理」にかぎられています。つまり、なによりもまず黒人たちに日常的に行使されている白人社会からの暴力に、あんまりやりつつけるならいつまでも黙ってはいないぞ、という姿勢を示すことに目的があったのです。マルコム自身、積極的・攻勢的な暴力を推奨したことはありません。「私は暴力を認めない。事実、合衆国に存在する暴力の犠牲者はアメリカ黒人であり、私は黒人大衆が白人に対抗して無差別に暴力行為に訴えることを主張したことはない」。その意味で、マルコムXのいう暴力は「反動的」、つまりリアクションであり、二つのものを同時に可視化するための戦略なのです。第一に、アメリカ社会のなかに制度化されている黒人やそれ以外のマイノリティに対する構造的な暴力、第二にブラック・コミュニティのはらむ潜勢力。つまり、暴力をこゝむりながら、押し黙ったり、分裂して暴力を内向させる

ばかりではない、もし連帯するならば強力なものになる力をブラック・コミュニティはすでに保持しているのだ、ということの示威。マイケル・ハートは、マルコムXの思想を一言でいうならば、それは「友愛の理論」だ、と指摘しています。具体的な政治の領域では、ブラック・コミュニティの自律を唱えるマルコムという友愛は「コミュニティの「権」力」としてあらわれるものです。さらに、そのなかに位置づけられる暴力は、「友愛の暴力」である、ということです。

マルコムXのいまだにつづく根強い人気は、かれのいう暴力を、手段と目的の連関のなかではとらえられないような次元で考えることを求めているとおもいます。すなわち、マルコムXの存在と発言のパフォーマンスティヴな力です。暴力はそのパフォーマンスティヴな次元のうちに位置づけられねばならないのです。くり返しになりますが、目的(大義)↓手段(暴力)、という粗雑な図式で縮約される手前で、現実には、行為だけではなく言葉やイメージをふくみこんだ複雑な力の領域があります。マルコムはなによりまずこの平面にはたらかけるのです。ふたたびマイケル・ハートは次のように指摘しています。「じつさいには「マルコムにおいて」問いは、愛か憎しみかでも、暴力か非暴力かでもなく、力という観点から提起された」。ハート自身は、あとでまたふれますが非暴力にかなり手きびしい。非暴力主義は、スペクタクルの政治であり、犠牲者のイメージをまきちらすことで憤激をひき起こすことが目標のネガティヴなものである、というのです。しかし、マルコムの発言や表明された思考を、そのパフォーマンス的な表現空間の全体——マルコムの思想として残されているテキストのほとんどがスピーチの記録です——としてみるなら、マルコムとキングはそれほど異なることをやったわけではないとわたしは考えます。マルコムとキングに共通するのは——とりわけマルコムが親しかったのは——「従属する」ということにまつわる心理や感情でありました。マルコムは従属する者がいかなる心理のもとにあるのか、情動のもとにあるのかを、熟知していたのです。

それはかれが有能なハスラー(チンピラ)だったことと無縁ではないでしょう。まだ読まれたことのない方は、『マルコムX自伝』をぜひ読んでほしいとおもいます(ちなみに日本のある英米文学者がこの本を二〇世紀最高のアメリカ文学にあげていたと記憶します)。かれは、田舎から大都市ボストンに出たとき、まず人の顔を読むこと、つまり人の表情の一瞬の観察から、それがどのような人間なのか、とりわけだれが警官かを読みとる訓練をします。マルコムは、おそらく、そのような観察に長けていたからこそ



ゲッターでものしあがっていったのでしょから、いわば従属者の心理学者として有能であつたわけです。マルコムには、そういう意味では、抑圧され、服従を強いられる人たちに対する幻想はありません。「庶民」とは、かならずしも、人情にあふれ、たすけあい、はげましあう人たちではありません。虐げられた者たちは、仲間の成功を妬み、みずからの解放にがんとして抵抗し、抑圧者にへつらい、より弱い者をいじめ、よき指導者を裏切り、しばしば殺害し、仲間を売ることもあるものなのです。

そこから「性悪説」のようなイデオロギーにおちいると、シニカルな保守主義になります。しかし、たしか一七世紀オランダの哲学者スピノザがいつていたように記憶するのですが、性悪説も性善説もつまるところ人間の本性を粗雑化したイデオロギーにすぎないのです。ということは、つねにひとは、性善説と性悪説が要約する両極の中間状態にある。そして、この中間状態にしか隷属と解放のゲームは存在しない、あるいは、より正確に言えば、この中間状態ゆえに隷属と解放のゲームが存在するのです。

ここでは心理学という、問いの領域をあらかじめ狭く囲い込むような言葉じゃなくて、リビドー経済あるいは前個体的政治学という言葉を使いましょう。わたしたちが権力のゲームに巻き込まれるのは、まずはつきりとした争点や課題といった意識あるいは主体レベルの出来事の以前のレベル、情動や欲望などのレベルにおいてです。たとえばそれは、情動のレベルでは不安、恐怖、快楽、あるいは外面的には、表情の微妙な動き、仕草、などの平面で行使されているのです。たとえば、すぐれた映像作品は、ふつう見すごされてしまうこうしたレベル、いわば「ぎざし」のレベルの政治を浮き彫りにするでしょう。また、すぐれたアジテーターと呼ばれる人は、意識的にであれ無意識的にであれ、このことをよく理解している人にほかなりません。

当時のマルコムの演説を聴いたり記録映像をみたりすると、たとえば、白人に対して黒人のほうがすぐれているというような、単純な逆転法をよく使うわけです。そのような思想の内容は少なくとも決別するまでは、マルコムが最初に信奉していたネーション・オブ・イスラム<sup>(注四)</sup>の教義からもきているのですが、マルコムの口にかかれば、独特の生々しさ、生き生きとした躍動感を与えられます。「そうなのだ、黒人のほうが白人よりも優秀なのだ。いうまでもないではないか。歴史を遡ってもいい、私たちをアメリカ合衆国に奴隷として二〇〇年間閉じ込めてこき使ったのはたして黒人であつたか、ノー、白人である」と、こんなかたちで黒人と白人を対照的に列挙していくのです。黒人はこういうことをしたか？　ノー、白人はこういうことをしたか？　ノーとい

うようなかたちで、コール・アンド・レスポンスを活用しながら黒白の優劣を逆転させていく。シンプルに、リズムにのせて。そして、あなた方の皮膚の色は美しい、そんなに光っているじゃないか、と区切りを入れる。それを聞いたゲッター住民たちの表情は本当に輝くのです。

マルコムが暴力という言葉を使うとき、それは抑圧され、隠蔽された敵対性をあぶりだすことになります。そのような敵対性の抑圧、隠蔽こそが、じぶん自身への、したがって黒人同胞への、あるいはより一般的には水平的な関係のなかでの憎しみとなって折りかえされる原因です。さらにはそれが服従を永続させるエネルギーの源泉となっているのです。非暴力主義的な潮流による「汝の敵を愛せよ」という呼びかけも同罪どころかもっと性質がわるい、と、マルコムにいわせるならこうなります。

『自伝』のなかでマルコムXは、ハスラー時代をふりかえりながら、流行にのって、沁みる薬品で頭にやけどをつくりながらパーマをあてていた、美容院でのおれの姿を愚かさのあかしとして後悔しています。スパイク・リー監督による映画『マルコムX』の最初のシーンで使われていました。このパーマはコンクと呼ばれるものですが、ちぢれ毛の多いアフリカ系の人々がストレートな髪質にすることです。こしでも白人に近づきたいというコンプレックスの表現ともみなされています。こんな日常のささいなふるまいのなかに、自己憎悪がひそみ、再生産されているのです。マルコムは黒人の内側に深く折り重ねられている自己憎悪こそが、ブラック・コミュニティの無力の原因であり、人々をして抑圧者に対しみずから跪かせ隷属させてしまう源泉だと考えました。マルコムが白人社会に対する敵対をあらわにするとき、それはまず黒人たちからこの自己憎悪を解除させることにねらいがあったのです。ただ「隣人を愛せよ」といったところで解消できないぐらい、かつての「主人」から浴びせかけられつづけていた憎しみが黒人の内側に食い込んでいることを、マルコムはよく知っていたのですから。主流メディアはマルコムのことを「憎しみを煽るテロリスト」と罵倒しました。この定義はあきらかに粗雑なものです。こうしたレッテルを貼る人間よりはるかに、マルコムは憎しみという感情とそれがつくりだしてしまう人間のあいだの関係性についてなじんでいました。だからこそこの感情を抑制し、遠ざける方法を知っていたようにおもいます。なにより、白人ジャーナリストや評論家を相手にしたインタビューやテレビ番組の記録をみればわかります。かれはみずからを「悪魔化」しようとする悪意ある質問や発言に対して、つねに冷静に対応し、この発言自体

の根拠のなき、「偽善性」を露呈させることで、その発言を支えているものが憎しみであることをあぶりだしてしまうのです。だからこそ、一緒にテレビに出演することを、マルコムは敵対者たちは恐れました。

マルコムは、憎しみを煽ったというのではなく、むしろ、黒人たちの自己や他者にむかう憎しみ、怒りに変えたというべきです。この二つの感情はわかちがたくからまりあっているとはいえ、憎しみは状況総体や制度ではなく特定の人間や集団にむかいがちです。憎しみは、その感情をもたらず原因に遡り、根源的次元から根絶しようというのではなく、その結果であるもの——人間、集団——を排撃したり殲滅<sup>せんめつ</sup>することでカタルシスをえるという行動をみちびく傾向を強く帯びた感情だともいえます。それに対して、怒りは憎しみそのものを生みだしている、より広い条件にむかう、より思慮にひらかれた傾向があるようにおもわれるのです。権力はこの憎しみという感情のもつ傾向につけこみ活用します。ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』では、舞台となる全体主義国家には「憎悪の時間」が設けられていました。その時間になると国民は、敵の画像にむかって憎しみを表現しなければならぬのです。いま日本ではこのように制度化こそされていないものの、「憎悪の時間」はメディアによって生活時間全般にわたって設定されています。あるいは、たとえば復讐という感情にもとづく死刑は、憎しみの結晶のひとつともいえるでしょう。いまアメリカ合衆国（の一部）と日本が、死刑制度を存置させている数少ない先進国であることはなにかを示唆していないでしょうか？ それに対して、怒りはどこか生産性をはらんでいるのです。たとえばパレスチナ系アメリカ人としてイスラエルやアメリカ合衆国のパレスチナ政策を告発しつづけた知識人であるエドワード・サイードは、じぶんには怒りはあるが、憎しみという感情はあまりわからない、と述べています。憎しみにくらべて怒りは建設的である、と。

じぶんのことをののしったり憎悪の権化のように扱うそのあり方自体に憎しみがひそんでいることをマルコムは暴きだすといいましたが、それは憎しみが「制度化」されているからです。アメリカの制度はみずからのうちに、ほとんどだれも気づかなくなるほどその憎しみを一体化しているのです。

……ここアメリカにおいては白人はわれわれにわれわれ自身を憎むように教えてきた。われわれの肌を、われわれの髪を、わ

れわれの血を、われわれの存在そのものを憎悪せよと教えてきた。アメリカ白人こそ憎悪の教師である。憎しみを教えている時も、教えているのは法律のことだと誰かに思わせかねないほど悪質なものである。

だからこそ、マイケル・ハートのいうように、「憎しみの制度化や搾取という状況のなかで愛を語ることは、愛を抽象的なものにし、その実質的な内容を愛から抜き去ってしまうことである」。ここにキングへのマルコムによる批判の核心がありました。憎しみが制度化されている文脈のなかで愛は空転するのだとすれば、憎しみを癒すのはひとまずは愛ではないということになります。たしかに「愛のみが憎しみを克服できる(only love can conquer hate)」にしても、憎しみに愛のみでもって対処するのはむずかしい。人はみずからの受けた痛みをそれほどかんとんに抱擁することができないだろうし、たとえ個別の人間の感情を変えることに成功したとしても、憎しみをその内側に刻印した制度は次々と憎しみを生みだすからです。とすれば、憎しみを癒すのは、とりあえずは、この憎しみを際限なく再生産する装置そのものの解体にむかう怒りなのです。

(注二) 政治的アリーナ……アリーナは競技場や劇場のこと。この意味を踏まえ、ここでは、政治的な問いや主張が激しく争われるような社会の状況を指し示している。

(注三) 北部ゲット……ゲットはヨーロッパの都市にあったユダヤ人の居住地域。ここではアメリカ合衆国北部の大都市におけるアフリカ系アメリカ人などマイノリティの居住地区のこと。

(注四) ギャングスタイズム……ギャングスタは暴力的な犯罪集団で、それを示唆するような文化や態度のこと。

(注五) ネーション・オブ・イスラム……一九三〇年にアメリカ合衆国で生まれたアフリカ系アメリカ人のイスラム運動組織。ブラック・ムスリム・ムーヴメントともいう。

問一 傍線部に関して、「『ピースフル』なものであるとするイメージはまったくのあやまり」と判断した理由を三〇〇字以内で説明しなさい。(配点四〇点)

問二 この文章における「憎しみ」と「怒り」の関係とその作用について、四〇〇字以内で説明しなさい。(配点六〇点)

問三 この文章の内容を踏まえ、現代社会における「暴力」について、具体的な事例を挙げながら、あなたの考えを八〇〇字以内で論じなさい。(配点一〇〇点)